

	<p>ているのが、TABLE FOR TWO(TFT)である。小暮氏が TFT を立ち上げるまでのキャリア、立上げ時の様子、そして日本のみならず海外支部をもつまでに至った TFT の事業展開について伺った。スタッフ 3 名ながら、効果的に収益を上げるための Targeting を実行することで、約 430 の企業・団体が関わっているとのこと。いかに多くの企業や団体と協力しながら活動を広げていったのか具体的なエピソードを聞き、参加者はアクション・プラン作成に向けて多くの示唆を得た様子であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 坪内南氏 <p>東日本大震災を受け、「教育支援グローバル基金」を設立。教育支援事業 BEYOND Tomorrow を開始し、未来を担う若者が今回の災害によって教育機会を失われることのないよう、奨学金提供ならびに就学支援・リーダーシップ教育などの各種プログラムを提供し、次世代を担う人材輩出の支援を行っている。今後は、世界で起きる自然災害や戦争での孤児たちのために、グローバルモデルを構築していきたいとのこと。他社への共感力の育成が行動につながり、世界を変える、との思いを胸に、多くの人を巻き込んで教育支援事業を展開されている坪内氏のお話を通じ、思いを行動に移す、行動力の重要性を感じるセッションとなった。</p> <p><キャリアフォーラム 2></p> <ul style="list-style-type: none"> ● 森秀樹氏 <p>民間企業から世界銀行へ転進された森氏の経験、世界銀行で現在携わっているソーシャル・プロテクション分野の業務についての講義であった。統計や画像を用いた参加者とのディスカッションを通じ、エビデンスに基づいた議論の重要性について語った。最後に、将来グローバルに活躍することを目指す参加者に向けて、学生のうちに身につけるべきスキル等の具体的アドバイスを伝え、国際機関でのキャリア構築について考える良い機会となった。</p>
<p>参加者のコメント</p>	<p>小暮氏</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 社会貢献とビジネスを折り返合わせていくための、目に見える、見えない小さな工夫の積み重ねの大切さを学ぶことができた。 ・ 戦略的に TFT の活動を行っていることが印象的だった。少ない人員でできるだけ TFT の活動を広げることができるように、寄付の多い企業に対し重点的にサポートを行うこと、企業に営業に行く際には、「業界初」といったアピールを行う、TFT を採用している企業のロゴの並べ方は営業に行く企業によって変える、など、自分のもつ NPO の活動のイメージとは違ったお話を伺うことができ、とても参考になった。 ・ NPO の現実を率直にお話して下さり、率直に言えば、NPO は日本では難しい働き方だと感じてしまった。「今後、アメリカと同様に日本で NPO というキャリアがメジャーになるためには、資金とブランドイメージ（NPO での働き方がカッコいいというイメージ）が必要である」という最後の質疑応答からは、本来 NPO には大企業的要素のある組織を嫌悪して飛び込む人が多いものの、その一方で業界が大きくなるためには NPO が大企業的な要素を持つ必要がある、という矛盾があるのだなと感じた。

坪内氏

- ・ 自分のまわりにいる友人を通して、世界が身近になる、自分が他人から受けた優しさを、自分も誰かと共有したくなる、というきっかけから活動をしているという点に、大変共感した。
- ・ 積極的に多様性を自分の中に取り込もうとする姿勢に共感した。共通の前提が無い中で、今何ができるのかをベースに様々な人と協力しながら生きていく、その中で価値ある役割を担っていく、私もそんな生き方をしたいと感じました。
- ・ 「ローマは一日にしてはならず」ということに改めて気付かせて頂いた。日々の坪内さんの体験、努力が実を結び今野活動に結び付いているということで、私自身も日々の努力が欠かせないのだと改めて感じた。実践したい。

森氏

- ・ 講義内容が興味深かったこともさることながら、講義の進め方、受講生を話にグイグイと巻き込んでいく話術、プレゼンテーションスキルは、今後自分も真似していきたいと思った。
- ・ 印象的だったのは、世界機関で活躍するような人は、知識欲があり、何にでも興味を持つ、二つ以上の専門を持っている、という点だった。
- ・ 世界銀行にはどのような若者が集まってくるのか、その人たちのどのような点が優秀なのかといったことについて、数字から事象が読み取れる、パッションとブレインがあり且つ謙虚である、など非常に具体的にお話し下さったのがとても参考になった。自分が今後身につけるべきスキルのヒントを頂けたように思う。

アクション・プラン

アクション・プラン作成プロセス	<p>■プロセス</p> <p>1～3日目 課題の設定：問題の背景および範囲と重大さ (プログラム：事前課題、プレナリー・セッション、基本スキル) 事前課題への取組み、「国際保健の潮流」や「グローバルヘルス政策」等のレクチャーを受けグローバルヘルスの概観を把握し、各班に与えられたアクション・プランにおける問題の背景及び範囲、またこれまでどのような取組みがなされていたかについて理解を深める。</p> <p>また、「アクション・プラン作成プロセス」の講義(オリエンテーション)により、今回のプログラムで取組むべきアクション・プランフレームワークを明確に提示した。</p> <p>4～5日目 現状理解：課題の分解と絞り込み・構造の把握・仮説の設定と検証 政策の選択肢：打ち手の立案・比較・選択 (プログラム：分野横断的な講師によるレクチャー、リフレクション) 分野横断的な講師によるレクチャーや質疑応答、またそれらのレクチャーを第三者の視点で捉えなおすリフレクションの時間を使いながら、現状を多面的に捉え、問題の根本的原因は何かを考える。また、課題に対する解決策の考案、その予想効果や実現可能性についてまとめた。</p> <p>6～9日目 提言・実行戦略：打ち手の選択理由・実行戦略の概要 (プログラム：アクション・プラン作成、中間報告会) 各班で議論した内容をもとに、提言の主旨、具体的な実施戦略をまとめる。中間報告会にてメンターによるコメントを受け、翌日のアクション・プラン報告会に向けて全体の練り直しを行った。</p> <p>10日目 アクション・プラン報告 (プログラム：最終報告会) 班ごとにアクション・プランを報告する。各班に対して、政策立案者や講師から政策提言の良い点、改善し得る点のフィードバックを行った。</p>
アクション・プラン報告会	<p>■ 日時：2011年8月6日(土) 10:00-12:00</p> <p>■ 会場：東京大学 福武ラーニングシアター</p> <p>■ 講評者(敬称略)：</p> <p>黒川 清 (日本医療政策機構 代表理事)</p> <p>齋藤 ウィリアム 浩幸 (株式会社インテカー代表取締役社長、日本医療政策機構理事)</p> <p>坂之上 洋子 (ブランド経営コンサルタント)</p> <p>渋澤 健 (シブサワ・アンド・カンパニー株式会社 代表取締役、日本医療政策機構副代表理事)</p> <p>吉田 裕明 (日本医療政策機構 理事・事務局長)</p>

	<p>■ 式次第</p> <p>10:00 開会</p> <p>10:15 アクション・プラン発表 (4 班)</p> <p>11:15 審査委員のコメント</p> <p>11:50 総括</p> <p>12:00 閉会</p>
<p>アクション・プラン 概要</p>	<p>A班 : Polio Raises Leaders</p> <p>現地ヤングリーダーと日本学生（企業内定者）が、提携企業支援のもと、知識やスキルを習得し、現地 NGO と協力し、ポリオ撲滅のための問題解決フィールドワークに取り組む。これにより、非常在国（一度ポリオを撲滅した国）でポリオ対策を継続するための人材を養成する。</p>
	<p>B班 : Final Click for Polio</p> <p>NPO「世界の子どものワクチン(JCV)」の既存の仕組み（facebook の「いいね！」がクリックされるたびに 20 円の寄附を協賛企業が行う）を世界に拡大し、アクセス数を増加させるため、日本在住の外国人コミュニティや海外へ向かう日本人へ普及を働きかけ、イベントの企画などを行う。</p>
	<p>C班 : Happy Poli Poli Project</p> <p>ワクチン接種をするインセンティブを住民に与えると同時に、ワクチン接種の効果を上げるために衛生環境・栄養状態の改善を図り、長期的な子どもの QOL の向上に取り組むことを目的とした。具体的には、以下 2 案を提案。</p> <p>① Nin`Ja キャンペーン・・・ナイジェリアのワクチン接種者に対しておむつや高栄養価菓子を無償提供し、ワクチン接種のインセンティブを高め、子どもの栄養状態を改善。費用は、企業の商品売り上げの一部を寄付に充てる。</p> <p>② マイクロインシュアランス・・・マイクロインシュアランス（低所得者をターゲットにした保険）への加入機会の提供をインセンティブに、ワクチン接種を呼びかけ、長期的な子どもの QOL の向上を目指す。</p>
	<p>D班 : Bands Project</p> <p>常在国がポリオの輸出国となっている現状を食い止めるため、虫除けバンドを用いたワクチン接種キャンペーンの実施や、日本のポリオ回復者会からナイジェリアのポリオ回復者会へ、日本企業を通じた資金援助の仕組みを創出し、ワクチン接種の重要性を住民が深く理解し、ワクチン接種のインセンティブをつくることを目指す。</p>

<p>結果と 考察</p>	<p>審査の結果、C班が優秀班に選出された。</p> <p>A班 ポリオの撲滅に向けて、非城塞国への再定着を防ぐことこそが重要と考えた点がユニークであった。一般的に企業の巻き込みは一番苦勞するところであるので、その工夫があるとさらに良かったらう。</p> <p>B班 Facebook というソーシャルメディアに着眼し、既存の仕組みを上手く活用、拡大しよう、という発想がユニークであった。案では、スポンサーは1社であったが、複数のスポンサーを探し、より活動を拡大することも可能ではないだろうか。</p> <p>C班 子どものQOL工場に焦点をあてた、短期・長期的双方の観点によるクリエイティブなアイデアであった。多角的なアプローチにより、実現可能性の高さが熱意と説得力をもって語られ、コミュニケーション力も素晴らしかった。</p> <p>D班 虫除けバンドにより、ポリオのみならず、マラリア対策も視野にいれた、ボトムアップから導かれたアドボカシーである点と、日本とナイジェリアのポリオ回復者へ目を向けたプランである点が新鮮であった。</p>
-------------------	--

グローバルヘルス サマープログラム 2011 報告書



グローバルヘルス サマープログラム2011 報告書

Global Health Summer Program 2011 Report

目次

1. 「グローバルヘルス サマープログラム」とは.....	2
2. 「グローバルヘルス サマープログラム」概要.....	3
3. アクション・プランまとめ.....	8
4. 講師とメンター、スピーカーのご紹介.....	9
5. 参加者一覧.....	13
6. GHSP2011を終えて.....	14

「グローバルヘルス サマープログラム」とは

グローバルヘルス サマープログラム2011は、世界を舞台にグローバルに活躍し、より良い社会の実現に貢献することをキャリアにしたいと考える若者を対象とした、グローバル・ヘルス分野の次世代リーダー養成プログラムである。

グローバル・ヘルスという重要な地球規模課題に対し、日本が継続して貢献していくために、官民を巻き込んだどのようなアクションがあり得るのか、グローバル・ヘルスにおける重要課題の一つである、「ポリオ撲滅」をミッションとして具体的な解決策を考えた。

プログラムでは、グローバル・ヘルスや各界のリーダーや社会起業家によるレクチャーを受けた後、各チームに分かれ、フィールドワーク期間に、個人や団体、企業と議論・交渉を行い、社会にインパクトを与え得るアクションプランを策定、報告を行った。実現可能性の高い案は、プログラム終了後も継続して取り組むことを予定している

プログラムを通じて養う力

1. グローバルな視点
世界を活躍の場とするためには、幅広い知識のみならず、世界で起きていることを自分に引き付けて考える視点が重要である。世界的課題に対する認識を深め、日本がどのように世界的課題に貢献できるか、自分に何ができるかを主体的に考える力を養う。
2. コミュニケーション力
仕事を遂行する上で欠かせない表現力。いかに相手に「伝える」か、日常のコミュニケーションから、PPT資料の作成法までを学び、実践する。
3. 問題解決力
全体像を捉えた上で、注力すべき本質を見出し、切り込む力。限られた期間内にフィールドワークを行い、アクション・プランを策定するために、課題全体を広く捉えた上で、交渉すべき個人や団体、企業を見出し、アクションを起こすというプロセスを通じ、問題解決手法を実践で学ぶ。

プログラムの流れ

多様なバックグラウンドをもつ学生に対し、包括的かつ先端的な学びの場を提供すべく、以下の流れでプログラムを進めた。

DAY 1-3
知識とスキルの習得

DAY 4-7
フィールドワーク

DAY 8-9
アクション・プラン作成

DAY10
アクション・プラン発表

【開催期間】

2011年7月28日(木)～8月6日(土)

【開催場所】

東京大学本郷キャンパス

【主催】

特定非営利活動法人 日本医療政策機構
東京大学大学院 医学系研究科 国際保健政策学教室

「グローバルヘルス サマープログラム」概要

(敬称略)

7月28日(木)

オリエンテーション

特定非営利活動法人 日本医療政策機構

参加者の顔合わせを行い、本プログラムの意義、プログラムの流れ、アクション・プラン報告のためのガイドライン等の説明を行った。参加者は課題を確認した上で、本プログラム参加にあたっての各自の問題意識の所在について述べ、各自が本プログラムを通じて何をしたいのかを確認した。

グローバル課題に対するソーシャル・メディアの可能性～世界を動かすツール～ (昼食会)

近藤 正晃ジェームス(ツイッター社日本代表)

本講義では、講師自身がこれまで取り組んできた医療政策・グローバルヘルス課題への取り組みに続き、震災時の実例を参考に、Twitterなどのソーシャル・メディアが世界的課題に対して果たし得る役割について考えた。社会問題の解決には、複数の異なるステークホルダーの協力が重要となるが、ソーシャル・メディアは、人と人をつなげることによって、社会を変革させる力を生み出すことが可能である。ソーシャル・メディアにより、これまでのトップダウン方式だけでなく、ボトムアップによる、社会的な課題設定と解決も今後は期待できるのではないかと話され、第一講義は締めくくられた。

Polio Eradication and UNICEF's role

平林 国彦(国際連合児童基金(UNICEF)東京事務所代表)

「なぜポリオは根絶されるべきなのか？」という問いから始まった本講義は、なぜこの課題に挑もうとしているのか、根絶によりどのようなアウトカムがあるのか、について参加者がディスカッションするところから始まった。続いて、ポリオの現状・ウィルスのタイプ・感染経路・症状・予防方法・ワクチン接種等について、UNICEFのポリオに対する取り組みと合わせて学んだ。最後に、平林氏は、公衆衛生においては、いかに資金を効率よく使用し、多くの人を救うか、という視点で考えることが多いが、一人一人を幸せにする、という意識も大事にしてほしい、と強調された。

Japan's contribution to global health

金森 サヤ子(外務省 国際協力局 地球規模課題総括課 外務事務官)

本講義では、DAH(Development Assistance for Health)とODA(Official Development Assistance)を様々な角度から考察し、グローバルヘルスの過去20年の潮流及び、日本のグローバルヘルスへの貢献について、学んだ。2000年にミレニアム開発目標(MDGs)が設定され、2015年までに達成すべき8つの目標が明確化されたものの、目標の達成は依然として厳しい状況であり、更なる取組みが欠かせない。グローバルヘルスへの貢献が外交手段としても重要な役割を担うなか、日本のグローバルヘルス政策の強化及び、国際的に活躍できる人材の育成・輩出の重要性についてディスカッションを行った。

7月29日(金)

国際保健の潮流

黒川 清(特定非営利活動法人 日本医療政策機構 代表理事)

「incunabula」という言葉から始まった本講義は、15世紀のグーテンベルグの印刷革命、及び最近の中東のツイッター革命を取り上げ、情報の広がりがいかに大きな力を持ち得るか、を考えた。情報が瞬時に世界中に広がる今、3.11に発生した東日本大震災への対応をめぐる、個々の日本人の素晴らしさが称賛された一方、日本の「組織」の弱さや不備が世界中に露呈する結果となった。政治・経済が一つにつながるグローバルな世の中で、我々は、グローバルヘルスをはじめとした、地球上の重要な課題を共に解決していかなければならない。これからの日本には、組織の枠にとらわれず、グローバルに活躍できる個人が必要である。黒川氏は、世界を舞台に活躍することを目指す受講生に向けて、学生のうちに海外に行き、知識・経験を積むこと、実践・行動力の重要性を語り、講義は締めくくられた。



問題解決の基本&コミュニケーション

山崎 蘭加(ハーバード・ビジネス・スクール日本リサーチ・センター シニア・リサーチ・アソシエイト)

アクション・プラン作成に向けての思考プロセスを学ぶ目的で、受講者がグループに分かれて演習問題に取り組んだ。プランの段階で必要なMECE、ロジック(イシュー)ツリーにより、論理的に議論を展開する手法を学び、リサーチ、分析、まとめ・ストーリーライン作成といった一連の問題解決プロセスについて演習を重ねた。その後9日間のプログラム中、参加者は当講義によって得られた問題解決の基本スキルに頻繁に立ち返り、ロジックに基づいた視点からの議論を試みた。

プレゼンテーション・インタビュー

山崎 蘭加(同上)

プログラム最終日の報告会に向けたプレゼンテーションスキルの習得を目的とした本講義では、日本のグローバルヘルス政策に関する現状と課題について短時間にまとめ、発表するというグループ演習が行われた。受講者はプレゼンテーションの組立て、スライドの作り方、発表方法等の基本スキルを学んだ。インタビューの方法についても学んだ後、「伝えたい気持ちが大事」というかたちで締めくられた本講義により、受講者は単なるスキルにとどまらないコミュニケーションのあり方について学んだ。

ポリオ撲滅に向けた取組みを中心に

尾身 茂(自治医科大学教授)

本講義では、尾身氏がWHOにて、西太平洋地域のポリオ根絶に携わった経験を中心に、ポリオ根絶までの困難ややりがい、また、将来グローバルに活躍することを目指す受講生へ向けて、キャリアアドバイスを話された。ポリオ根絶に向け、大規模なサーベイランスの実施、継続的な資金獲得の試み、ワクチン接種をめぐっての各国の保健大臣との折衝など、尾身氏の実験の経験を踏まえ、当時の様子を詳しく伺うことができた。最後に、優れたリーダーになるには、社会に対する高い意識をもち、物事を総合的に捉え、正しいことをする決断力が大切であるということを強調された。

7月30日(土)

「変わらない」を、変えていくーソーシャルマーケティング思考のすすめー

石川 善樹(株式会社キャンサーズキャン ディレクター)

本講義は、マーケティングの手法を社会問題解決に活用する、ソーシャル・マーケティングについての理解を深めることを目的として行われた。クイズや映像、実例を多用しての石川氏の講義は、講義のプレゼンテーション自体が受講者の心を捉えたようであった。戦略を立てるだけでなく、その戦略をいかに表現するかが大事である、という講義全体を通じてのメッセージに、受講生は、受け手の立場に立ち、共感を生む表現の重要性を認識した様子であった。

グローバルヘルス政策

渋谷 健司(東京大学大学院 医学系研究科国際保健政策学教室 教授)

本講義では、世界が注目するグローバルヘルス課題の現状、プレーヤー及び、日本の当課題への対応について学んだ。グローバル社会に生きる今、グローバルヘルスという地球規模課題に対し、日本がどのように貢献をするかは、政治・経済問題として重要であり、日本のグローバルヘルス政策の強化が求められている。また、今回のテーマであるポリオは最優先事項なのだろうか、と受講生に問われ、ディスカッションの後、データを見ながらグローバルヘルスの現状を定量的に把握し、エビデンスに基づいた議論を展開することの重要性を確認した。

ワクチンを通じたグローバルヘルス課題へのJCVの取組み

新井 俊郎、窪田 順子(世界の子どもにワクチンを日本委員会)

本講義では、感染症の完全予防を目指し、募金活動や社会啓発により、途上国へのワクチン支援を行っている、「世界の子どもにワクチンを」(JCV)の活動展開を通じ、日本の国際保健NGOの現状と課題について学んだ。福岡ソフトバンクホークスの和田毅投手が始めた「僕のルール」や、企業との連携を通じた募金活動が紹介され、「社会に対して何かしたい」と考える一般の人が、気軽に参加できる仕組み作りの重要性について考えた。日本の多くのNGOがおかれた厳しい運営状況など、課題はあるものの、変わりつつある日本の寄付文化をとらえ、今後の更なる活動展開が期待される。



(敬称略)

Global Polio Eradication Initiative

岡安 裕正 (世界保健機関 (WHO) ポリオ撲滅イニシアティブ 医官)

現在ジュネーブのWHOに勤務する岡安氏と、初の試みとしてビデオ会議形式で講義を行った。ポリオ撲滅に向けた、これまでの対策、今後必要な取組みを説明された上で、日本に期待される役割について考察した。ディスカッションでは、日本はこれまで、ポリオ対策に多額の財政支援や技術開発支援を行ってきたが、今後は、より積極的にイニシアティブをとり、他国と協力して、撲滅に向けた最後の一インチを推し進めることが必要ではないか、との意見が出された。

7月31日(日)

Access to Medicines

スリングスビー B.T. (エーザイ株式会社 グローバルパートナーソリューションズ ディレクター)

英語で行われた本講義では、エーザイ株式会社の医薬品アクセスの改善に向けた取組みを通じ、社会的課題に対して企業が市場をベースとしてどのように貢献できるか、について考察した。世界中には、効果的な治療法が存在するにもかかわらず、貧困や医療システムの不備などから必要な医薬品が入手できない多くの人々がいる。医薬品アクセスを改善するには単に医薬品を供給するだけでなく、それぞれの地域の医療ニーズの見直し、イノベーションの創出及び、継続的な医療提供が必要である。中長期的観点に基づいた、企業と途上国パートナー機関・団体の双方に価値のある、新しいビジネスモデルの可能性についてディスカッションを行った。



8月1日(月)～8月3日(水)

フィールドワーク・中間報告会

各班に分かれ、ガイドラインに基づいてポリオ撲滅に向けた具体的課題の設定、打ち手の立案を行い、期間内で可能な限りプランを実行することを試みた。フィールドワーク期間中は、実社会で活躍するメンターが、適宜アドバイスを行う機会を設けた。中間報告会では、本番同様に班毎に報告を行い、メンターの山崎氏より、論理性、実現可能性、プレゼンテーション法等について助言を得た。

キャリアフォーラム1 ～「世界を変える」を仕事にする～

「グローバルヘルス サマープログラム」受講生が、社会貢献を目指し、グローバルに活躍している2名の先輩の体験談を聴き、国際的なキャリアパスを描く際の心構え、参考情報及びネットワークを得る機会を創出することを目的とし、キャリアフォーラム1を実施した。

<パネリスト>

小暮 真久 (TABLE FOR TWO International 代表)

世界の約70億人の人口のうち、10億人が飢えに喘ぐ一方で、10億人が肥満など食に起因する生活習慣病に苦しんでいる。この食の不均衡の同時解決を目指して活動しているのが、Table For Two (TFT)である。小暮氏がTFTを立上げるまでのキャリア、TFT立上げ時の様子、そして日本のみならず海外支部をもつまでに至ったTFTの事業展開について伺い、いかに多くの企業・団体と協力しながら、活動を広げていったか、具体的なエピソードを聞き、参加者はアクション・プラン作成に向けて多くの示唆を得た様子であった。

坪内 南 (教育支援グローバル基金 理事・事務局長)

東日本大震災を受け、「一般財団法人 教育支援グローバル基金」を設立。教育支援事業BEYOND Tomorrowを開始し、未来を担う若者が今回の災害によって教育機会を失われることのないよう、奨学金提供ならびに就学支援・リーダーシップ教育などの各種プログラムを提供し、次世代を担う人材輩出の支援を行っている。他者への共感力の育成が行動につながり、世界を変える、との思いを胸に、多くの人を巻き込んで教育支援事業を展開されている坪内氏のお話を通じ、思いを行動に移す、行動力の重要性を感じるセッションとなった。

8月5日(金)

キャリアフォーラム2 ～途上国で貧困世帯を守る～

キャリアフォーラム1に続き、開発分野で国際的に活躍するスペシャリストの体験談を聞き、仕事内容、キャリアについてアドバイスをもらえる場を設けた。

<パネリスト>

森 秀樹 (世界銀行 緊急社会対策プログラム担当マネージャー)

民間企業から世界銀行へ転進された森氏のご経験、世界銀行で現在携わっているソーシャル・プロテクション分野の業務について語られ、最後に受講生との質疑応答を行った。統計や画像を用いた受講生とのディスカッションを通じ、エビデンスに基づいた議論の重要性について語った。最後に、将来、グローバルに活躍することを目指す受講生に向けて、学生のうちに身につけるべきスキルなどの具体的アドバイスを行い、国際機関でのキャリア構築について考える、よい機会となった。



8月6日(土)

<最終報告会>

10日間にわたるプログラムの総括の場として、各班がアクションをまとめ、グローバルヘルスの専門家や、社会で活躍する起業家から講評を得た。

時間: 10:00-12:00

会場: 東京大学 福武ラーニングシアターB2F (福武ホール)

審査員(敬称略):

黒川 清 (日本医療政策機構代表理事)

齋藤 ウィリアム 浩幸 (株式会社インテカー代表取締役社長、日本医療政策機構理事)

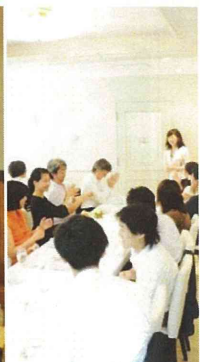
坂之上 洋子 (ブランド経営コンサルタント)

渋谷 健 (シブサワ・アンド・カンパニー株式会社代表取締役、日本医療政策機構副代表理事)

吉田 裕明 (日本医療政策機構理事)

式次第

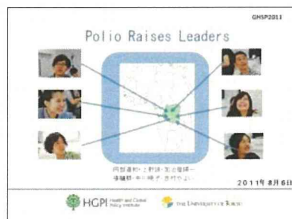
10:00	開会
10:15	アクション・プラン発表(4班)
11:15	審査員のコメント
11:50	総括
12:00	閉会



アクション・プランまとめ

アクション・プラン報告会では、10日間にわたる各班の取組みを発表した。審査の結果、C班が優秀班に選出された。各班のアイデアの実現も視野に入れながら、今後、日本医療政策機構では、ポリオ撲滅に向けた取組みを強化していく。

A班 Polio Raises Leaders



発表要旨

現地ヤングリーダーと日本学生(企業内定者)が、提携企業支援のもと知識やスキルを習得し、現地NGOと協力してポリオ撲滅のための問題解決フィールドワークに取り組む。これにより、非常在国(一度ポリオを撲滅した国)でポリオ対策を継続するための人材を養成する。

講評

ポリオの撲滅に向けて、非常在国への再定着を防ぐことこそが重要と考えた点がユニークであった。その解決に向けて、「リーダーの育成」が必要であると考え、発展途上国と日本のヤングリーダー、アフリカNGO、提携企業、大学・研究機関それぞれのインセンティブが検討されていた。一般的に企業の巻き込みは一番苦労をするところなので、その工夫があるとさらに良いだろう。

B班 Final Click for Polio



発表要旨

NPO「世界の子どもにワクチンを(JCV)」の既存の仕組み(facebookの「いいね!」がクリックされるごとに20円の寄附を協賛企業が行う)を世界に拡大しアクセス数を増加させるため、日本在住の外国人コミュニティや海外へ向かう日本人へ普及の働きかけ、イベントの企画などを行う。

講評

facebookというソーシャルメディアに着眼し、既存の仕組みを上手く活用、拡大しよう、という発想がユニークであった。①資金集めと②社会の巻き込みに焦点をあて、既存の活動をグローバルに展開するアイデア、また、一般のポリオへの理解度向上のためのアフターイベント開催などが、わかりやすく述べられた。発表案ではスポンサーは一社であったが、複数のスポンサーを探し、より活動を拡大することも可能ではないだろうか。

C班 Happy Poli Poli Project



発表要旨

ワクチン接種をするインセンティブを住民に与えると同時に、ワクチン接種の効果を上げるために衛生環境・栄養状態の改善を図り、長期的な子どものQOLの向上に取り組むことを目的とした。具体的には、以下2案を提案。

①Nin'Jaキャンペーン…ナイジェリアのワクチン接種者に対しておむつや高栄養価菓子を無償提供し、ワクチン接種のインセンティブを高め、子どもの栄養状態を改善する。費用は、企業の商品の売上げの一部を寄付にあてる。

②マイクロインシュアランス…マイクロインシュアランス(低所得者をターゲットにした保険)への加入機会の提供をインセンティブに、ワクチン接種を呼びかけ、長期的な子どものQOLの向上を目指す。

講評

子どものQOLの向上に焦点をあてた、短期・長期的双方の観点によるクリエイティブなアイデアであった。様々な個人や団体との面談、また、facebookを使用した意見聴取など、多角的なアプローチにより、アクション・プランの実現可能性の高さが熱意と説得力をもって語られた。発表の際の、コミュニケーション力の高さも素晴らしい。

D班 Bands Project



発表要旨

常在国がポリオの輸出国となっている現状を食い止めるため、虫除けバンドを用いたワクチン接種キャンペーンの実施や、日本のポリオ回復者会からナイジェリアのポリオ回復者会へ、日本企業を通じた資金援助の仕組みを創出し、ワクチン接種の重要性を住民が深く理解し、ワクチン接種のインセンティブをつくることを目指す。

講評

実際にアフリカでの体験から生まれた、虫除けバンドを使ったアドボカシーのアイデアが説得力を持って語られた。虫除けバンドにより、ポリオのみならず、マラリア対策も視野にいれた、ボトムアップから導かれたアドボカシーである点、また、日本とナイジェリアのポリオ回復者へ目を向けたプランである点が新鮮であった。

講師とメンター、スピーカーのご紹介

講師

※講演順、敬称略

7月28日(木)



近藤 正晃ジェームス
Twitter 日本代表

慶応義塾大学経済学部卒、ハーバード経営大学院修了。マッキンゼー・グローバル・インスティテュートの中心メンバーの一人として、日本・台湾・米国・英国・フランス・ドイツ・ロシアにおける国家経済政策を立案。2003年に東京大学医療政策人材養成講座を、2004年に日本医療政策機構をそれぞれ設立、運営に携わる。2007年、TABLE FOR TWO Internationalを設立。2009年より、国家戦略室長付参事官、内閣官房副長官秘書官、内閣国際広報戦略官に従事。2011年より現職。ダボス会議のYoung Global Leaderに選出。



平林 国彦
国際連合児童基金 (UNICEF) 東京事務所代表

医学博士。約10年間、国立国際医療センター国際医療局に勤務し、ポリビア、コロンビア、インド、インドネシア、ホンジュラス、ウズベキスタン、南アフリカ、ベトナム等の病院での技術指導、保健省での政策立案支援などを担当。JICA専門家・WHO短期コンサルタントなどを経て、2003年からユニセフ勤務。アフガニスタン、レバノン、東京事務所での勤務を経て、2008年からインド事務所副代表を務める。2010年4月からユニセフ東京事務所代表。



金森 サヤ子
外務省 国際協力局 地球規模課題総括課 外務事務官

筑波大学第二学群生物学類卒業後、ロンドン大学公衆衛生学・熱帯医学大学院にて医学寄生虫学修士課程を専攻。ビジネスコンサルタントを経て東京大学大学院医学系研究科国際地域保健学博士課程修了。現在、外務省国際協力局地球規模課題総括課にて保健援助政策立案及び戦略策定に従事、東京大学大学院医学系研究科国際保健政策学非常勤講師など。

7月29日(金)



黒川 清
特定非営利活動法人 日本医療政策機構 代表理事

1962年東京大学医学部卒業。69年に渡米し、79年UCLA内科教授。83年に帰国後、東京大学内科教授、東海大学医学部長、日本学術会議会長(2003-07年)、内閣特別顧問(2006-08年)、WHOコミッショナー(2005-09年)などを歴任。現在、日本医療政策機構代表理事、IMPACT Foundation Japan Chair and Founder、政策研究大学院大学教授。『大学病院革命』(日経BP社)、『イノベーション思考法』(PHP新書)、『e-Health改革 ITで変わる日本の健康と医療の未来』(日経BP社)ほか著書多数。
ブログ<<http://www.kiyoshikurokawa.com/>>

Photo: Tetsuo SAKUMA



山崎 蘭加
ハーバード・ビジネス・スクール 日本リサーチ・センター シニア・リサーチ・アソシエイト

マッキンゼー・アンド・カンパニー、東京大学先端科学技術研究センターを経て、2006年よりハーバード・ビジネス・スクール(HBS)日本リサーチ・センター勤務。主にHBSで使用される日本の企業・経済に関するケース作成に従事。また2010年よりフェローとして東京大学Global Health Leadership Programの運営に関与。東京大学経済学部、ジョージタウン大学国際関係大学院卒業。

※ 山崎さんは、メンターもご担当。



尾身 茂
自治医科大学教授

1978年自治医科大学卒業(1期生)。伊豆七島を中心とする地域医療に従事。1990年から世界保健機関(WHO)西太平洋地域事務局に勤務。感染症部長としてアジアに於ける小児麻痺(ポリオ)根絶達成。1999年2月世界保健機関(WHO)西太平洋地域事務局の第5代地域事務局長に就任。SARS対策では、陣頭指揮を執る。2009年日本政府新型インフルエンザ対策本部専門家諮問委員会委員長。医療再生に向けての政策提言も行っている。現在、自治医科大学教授、WHO執行理事。

7月30日(土)



石川 善樹
株式会社キャンサースキャン ディレクター

1981年広島県生まれ。瀬戸内海の離島で、へき地医療を行う父の影響を受け、社会の健康づくりを志す。2003年東京大学医学部健康科学・看護学科卒業、同大学院医学系研究科修了。2008年ハーバード大学公衆衛生大学院(Health Policy and Management専攻)修了後、現在はキャンサースキャンのディレクター。

専門: Social Marketing/Social Innovation/Health Communication/Public Health



渋谷 健司
東京大学大学院 医学系研究科国際保健政策学教室 教授

東京大学医学部医学科卒業後、東京大学・帝京大学での勤務を経て米国ハーバード大学公衆衛生大学院にて博士号取得。WHOのGlobal Programme on Evidence for Health PolicyとHealth Statistics and Evidence, Measurement and Health Information Systems, Evidence and Information for Policyにて勤務した後2008年から東京大学大学院医学系研究科国際保健政策学教室の教授に就任。専門分野は保健政策、経済学、人口学、統計学、疫学。



窪田 順子
世界の子どもにワクチンを 日本委員会

2001年日本女子大学卒業。2001年より2年間販売職に就職、2003年よりNPO法人地球緑化センターが幹旋する「緑のふるさと協力隊」に参加。1年間山口県で地域振興ボランティアに関わり、その後山口県西部森林組合に就職。2007年より財団法人国際農業者交流協会が主催するアメリカ農業研修を経て、2011年1月1日より、認定NPO法人世界の子どもにワクチンを 日本委員会(JCV)の広報部兼学校事業部に所属。



岡安 裕正
世界保健機関 (WHO) ポリオ撲滅イニシアティブ 医官

米国海軍病院、マッキンゼー・アンド・カンパニーを経て、2008年より現職
慶応大学医学部卒業、スタンフォード経営大学院修士課程修了(MBA)

7月31日(日)



スリングスビー B.T.
エーザイ株式会社 グローバルパートナーソリューションズ、ディレクター

グローバルパートナーソリューションズは、医薬品へのアクセスを長期的かつ持続可能に改善するための新しいパートナーシップ型ビジネスモデルの実施、発展途上国における感染症の治療薬を対象とした新しい共同開発モデルの開発、およびエーザイとリンパ管フィラリア症制圧に携わる世界保健機関(WHO)とのパートナーシップの運営を行っている。

エーザイ入社前は、日米の営利・非営利機関の設立に携わり、「ランセット」、「アメリカン・ジャーナル・オブ・パブリックヘルス」、「ジャーナル・オブ・ジェネラル・インターナル・メディシン」などの学術専門誌に50編以上の論文を掲載するほか、医療研究に取り組む。ブラウン大学卒業後、京都大学および東京大学にて修士・博士号を、またジョージワシントン大学にて医学博士号を取得。

メンター



田中 謙司
東京大学大学院 工学系研究科 助教

2000年に東京大学大学院工学系研究科を卒業後、マッキンゼー社にて、電機、金融、医薬品業界等で経営コンサルティング業務に従事。03年より日本産業パートナーズに参画、未公開会社への投資および経営支援を担当。同社ヴァイスプレジデントを経て、06年より東京大学助手、07年より現職。専門は技術経営。08年工学博士取得。09年より二次電池社会システム研究会理事を兼務し、再生可能エネルギー導入を促進。

ツイッター：<http://twitter.com/#!/giro1215>

ブログ：<http://giro1215.cocolog-nifty.com/giro/>



福吉 潤
株式会社キャンサーズキャン 代表取締役

ハーバード大学経営学修士(MBA)。慶應義塾大学総合政策学部卒業後、1999年よりプロクター・アンド・ギャンブル社(P&G)にてブランドマネジャーとしてブランドマネジメント・マーケティング職に従事。2006年、マーケティングを社会問題解決に役立てるというソーシャルマーケティングを学ぶためハーバード大学ビジネススクールに留学。帰国後、がん検診の受診率向上にマーケティングを活かすソーシャルマーケティング会社を、ハーバード大学スクールオブパブリックヘルス(公衆衛生大学院)の同級生と起業。国立がん研究センターと協働し全国の自治体において地域モデル事業を実施中。東京都がん検診受診率向上施策検討会委員/厚生労働省がん検診受診促進企業連携推進事業アドバイザーボードメンバー。

ウェブサイト：<http://www.cancerscan.jp>



渡邊 さやか
soket Director、Kopernik Associate

国際基督教大学卒業、東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障プログラム」修了。2007年より日本IBM(入社当時はIBCS)にて、業務改善、環境系新規ビジネス策定など経営コンサルティング業務に従事。09年から社内Green & Beyond Community/リード、10年にはProbono事業立ち上げに参画。その傍ら、10年にNPO法人soket設立、米国法人Kopernik日本支部立ち上げに関わる。11年6月に日本IBMを退職し、東北の復興フェーズの仕組みづくり、産業復興に向けた東北でのビジネス構築に携わると共に、海外ビジネス展開支援をする。

Twitter: sayaka65

soket: <http://www.soket.me/>

Kopernik: <http://kopernik.info/>

キャリアフォーラム1 スピーカー



小暮 真久
TABLE FOR TWO International 代表

1972年生まれ。早稲田大学理工学部卒業後、オーストラリアのスインバン工科大で人工心臓の研究を行なう。1999年、同大学修士号取得後、マッキンゼー・アンド・カンパニー東京支社入社。同社米国ニュージャージー支社勤務を経て、2005年、松竹株式会社入社、事業開発を担当。その後、「TABLE FOR TWO」プロジェクトに参画。2007年NPO法人・TABLE FOR TWO Internationalを創設し、理事兼事務局長に就任。社会起業家として日本、アフリカ、米国を拠点に活動中。



坪内 南
一般財団法人 教育支援グローバル基金 理事・事務局長

東京都出身。中学校3年より日本を離れカナダへ単身留学。高校最後の2年間は、経団連から全額奨学金を受け、カナダの全寮制インターナショナルスクールに通う。慶応義塾大学総合政策学部卒業。College Women's Association Japan (CWAJ)及び日本/世界銀行共同大学院奨学金プログラムの奨学生として、マサチューセッツ工科大学都市計画修士課程修了。マッキンゼー・アンド・カンパニー、難民を助ける会カプール事務所駐在、世界経済フォーラム(ダボス会議事務局)、日本医療政策機構、バーレーン経済開発委員会などを経て、2011年6月より現職。より広い社会、新しい世界を経験し、志を持つ仲間と切磋琢磨することこそが広い視野を持つリーダーの育成に不可欠と考え、そのような機会を若い世代が持つことが東北の復興につながると信じて教育支援グローバル基金の設立に参画。

2004年 社会貢献支援財団21世紀若者賞受賞。

2006年～2008年 世界経済フォーラム・グローバルリーダーシップフェロー

キャリアフォーラム2 スピーカー



森 秀樹
世界銀行緊急社会対策プログラム担当マネージャー

東京大学農学部卒、アメリカン大学国際開発学修士、デューク大学MBA。国連ラテンアメリカ・カリブ経済委員会を経て、1993年、ヤングプロフェッショナルとして世界銀行入行。ラテンアメリカ/欧州・中央アジア地域局で社会保障・人間開発分野を担当。世界銀行の社会的保護プログラム、条件付現金給付(CCT)プログラムに長年携わる。2007年、人事局ヤングプロフェッショナル・プログラム担当マネージャー。2009年10月より現職。

参加者一覧

(五十音順、敬称略)

相田 華絵	London School of Hygiene & Tropical Medicine, MSc-Public Health in Developing Countries 進学予定
阿部 道和	一橋大学 国際公共政策大学院経済政策プログラム・医療経済学ゼミ 1年
有田 祐起	大阪大学 医学部医学科 4年
今西 佑希	東京大学 工学系研究科システム創成学専攻宮田研究室 修士2年
加治屋 陽一	北京大学 光華管理学院・金融専攻 修士1年
神田 美希子	東京大学大学院 医学系研究科国際保健学専攻国際保健政策学教室 修士1年
嶋田 庸一	東京大学大学院 公共政策学教育学部 奥村裕一研究室 修士2年
袖野 美穂	金沢大学 医学部医学科 6年
橘 昌利	千葉大学 医学部医学科 3年
張 驪驛	東京大学 薬学部・天然物化学教室 4年
土屋 弘	パリ第一大学 IEDES 大学院1年候補生
中川 暁子	Brandeis University, International and Global Studies, Environmental Studies 3年(9月より)
中川 弘子	名古屋大学大学院 医学系研究科・予防医学 博士1年
中村 有紀子	東京女子医科大学看護専門学校 看護 1年
平野 慧	慶應義塾大学 法学部政治学科麻生良文研究会(公共経済学) 4年
堀内 沙央里	神戸大学 保健学研究科国際保健学領域感染症対策分野 1年
元橋 一輝	東京大学 法学部公法コース城山ゼミ 4年
安田 翔	東京大学 教養学部文科Ⅱ類 2年
山崎 博子	聖路加看護大学 看護学科 4年
吉村 やよい	大阪市立大学 医学部看護学科 3年

